別記様式第２号-1（第５条、第１０条、第１９条、第２４条関係）

学位論文の要旨	
氏　名	クディロク・カディル
学位論文題目	A Study of the Gerund and Present Participle in Shakespearean English （シェイクスピアの英語における動名詞と現在分詞）

In this thesis the problems of gerund and present participle are discussed. Also we will examined from what the *-ing* form is taken, gerund or present participle.

In his *Present-Day English* Pence (1947, p. 264) states that 'gerund is sometimes as the object of a (originally the preposition on). The a is frequently dropped.'

Some examples are given below.

1. Let's go a-fishing.
2. We all went a-berrying in the woods.
3. My mother has gone a-calling.

Pence regards the *-ing* form as a gerund. In the example, my mother has gone a-calling, if a- is added to the *-ing* form, it is clear that the *-ing* form is a gerund. However, if a- is omitted, can we regard it as a gerund?

Curme (1947, p. 54) also writes in his *Principles of English Grammar* that the 'present participle and gerund were used in the predicates to express the action to be proceeding in the same way'

He is writing a letter. (present participle)

He is in writing of a letter. (gerund)

So we will discuss the problems of the gerund and present participle comparing Present -Day English and Shakespearean English.

The organization of thesis is as follows:

In Chapter 1, 2 and 3 I will present a brief survey of views of *-ing* form representative scholars views.

In Chapter 4 and 5, I will discuss the development of gerund and present participle in the Shakespeare's works. And confirm the actual usage of *-ing* form in the Shakespearean English. Finally I will give a brief summary and all the examples of gerund and present participle from Shakespeare's works in the appendix.

別記様式第７号（第１３条、第２７条関係）

平成２０年２月４日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長　殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻　氏名　クディロク・カディル
(Kudeluke Kadeer)

学位論文題目

A Study of the Gerund and Present Participle in Shakespearean English
（シェイクスピアの英語における動名詞と現在分詞）

論文審査の概要

１．論文の目的と概要

現代英語の動名詞と現在分詞は全く同じ形態を有しているが機能には違いがある。本論文では、もともと違う形態を持ち、違う機能を持っていた動名詞と現在分詞がいつ、どのようにして同じ形態を持つようになったのか、そしてもともと純粋な名詞であった動名詞がどのようにして動詞的機能を獲得したのか。他方、他のヨーロッパの言語にはみられない進行形という形態と機能をいつどのようにして英語は獲得したのかを子細に検討している。そして、英語史全体を考慮に入れながら、文献史料としてシェイクスピアの英語を取り上げている。英語史上でもシェイクスピアの英語を取り上げるのは、英語は一般的に、音声、形態、シンタックス、あるいは意味・語彙といったどのような言語現象もシェイクスピアを境としてゲルマン語以来の古い英語から新しい近代英語・現代英語へと変容しているからである。

本論文では、–ing という同じ形態を持つ動名詞と現在分詞および進行形の発達においても、シェイクスピアの初期作品から中期作品を経て後期作品にいたる間に重要な発展がみられることを実証することを意図している。

２．論文の構成

本論文は以下のような本文、200 ページに及ぶ APPENDIX および BIBLIOGRAPHY よりなる。

Introduction.....1
Chapter Ⅰ The Gerund in Present-Day English..... 2
Chapter Ⅱ The Present Participle in Present-Day English..... 13
Chapter Ⅲ A Historical View of the Gerund and Present Participle...15
Chapter Ⅳ The Gerund in Shakespearean English..... 22
Chapter Ⅴ The Present Participle in Shakespearean English 48
CONCLUSION.....70
APPENDIX.....72
BIBLIOGRAPHY..... 284

序論で簡潔に問題提起をした後、第１章では、現代英語の動名詞の概要とその問題点、第２章では現代英語の現在分詞の概要とその問題点を述べて動名詞、現在分詞の形態と機能を論じるには歴史的な考察が有用であることを述べている。

第３章では、もともと違った形態を持っていた動名詞(-ing, -yng) と現在分詞(-ende, -inde)がどのように融合したいったのかが、OED, Curme, Jespersen, Kruisinga 等の諸先行研究を参照しつつ考察されている。

第４章では、動名詞が古英語以来どのような経緯を経て中英語の形態と用法を獲得していったかが Tajima(1985)に基づき６種類の型に分類して述べられている。1100 年から 1500 年までにそれぞれの型の総出現数が 4960 例であることを述べた後、型別に 50 年ごとの出現数を表で示し、総数でも顕著に発展していることを証明している。続いて、シェイクスピアの全劇作品を年代順に作品ごとの出現数を示し、４種類の型に分類の上あげられている。そして、現代英語の動詞的機能獲得への過程にあることが指摘されている。続いて、シェイクスピアの英語にあって、その分類が難しい例が具体的にひとつひとつ注釈、辞書、研究書の記述を点検して調査されている。これらの綿密な文献学的調査は今後の研究に有益な資料となるであろう。

第５章では、シェイクスピアの英語における進行形の特徴が論じられている。その第１は、シェイクスピアの英語における進行形は感嘆詞・間投詞と共起する場合が多い。第２は、動詞の中でも coming, going の頻度が高い。第３に、進行形は関係詞節中に多く使用されている。第４に、単純過去の動作・行為が生じたときに進行中であった動作・行為を表すのに進行形が用いられる傾向がある。第５に、現代英語では進行形を取らない動詞が進行形を取ることがある。第６に、受動態の進行形は１８世紀にしか現れない。従って、シェイクスピアでは、The house is building と The house is being built の区別がない。そして、それぞれの例が作品の年代順にあげてあり有用である。

３．評価すべき点

本論文の評価すべき点は、第１に、-ing 形の歴史的概要を英語史全体の中で明らかにしたこと。第２に、初期から中期を経て後期へと作品が進むにつれてシェイクスピアの英語における動名詞と進行形の発達が具体例を示しながら明らかにされていること。第３に、 動名詞は４つの型に沿って年代順に現代英語の動名詞へと変容している様子が具体的に示されていること。第４に、進行形は、間投詞・感嘆詞と共起する場合が多いことが実証されていること。第５に、進行形は coming, going が他の動詞にぬきんでて頻用されていること。これらのことは先行研究では本論文ほど組織立てて明確に論じられていないことは評価できる。また、Appendix はテキストに基づくシェイクスピアに現れる動名詞、進行形の網羅的なリストであり、今後の研究および他の研究分野に資するところが大きいであろう。

４．問題点と今後の課題

本論文には、従来明確に論じられていない点を明らかにした指摘がいくつかあるが、言語学・英語史の視点に基づく論理的説明がやや不足している。今後は、蓄積したデータに基づいて研究を進めることが求められる。

５．総合評価

以上に述べてきたように、残された課題もあるが、必要にして十分なデータに基づき、有用な指摘もなされており、将来性に富んだ研究であると認めることができる。従って、本研究科の博士学位論文に価すると判定する。

授与する博士学位　　学術

論文審査結果　　㊀・否

審査委員

主査　（氏名）三輪伸春　　副査　（氏名）濱崎孔一郎

副査　（氏名）木部暢子　　副査　（氏名）橋本功

副査　（氏名）佛尾達哉

別記様式第８号（第１３条、第２７条関係）

平成２０年２月４日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長　殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻　氏名　クディロク・カディル

(Kudeluke Kadeer)

学位論文題目

A Study of the Gerund and Present Participle in Shakespearean English

（シェイクスピアの英語における動名詞と現在分詞）

最終試験の概要

学位（博士）論文に関する最終試験を平成２０年１月２６日に行い、申請者による学位申請論文の内容説明の後、下記５名の審査委員から論文についての質問と申請者による応答を行った。

クディロクの論文は、形態を同じくする英語の動名詞と現在分詞の起源と発達を、特に動名詞と現在分詞の形態上の融合と機能の区別の問題について先行研究を十分に比較検討しながらシェイクスピアの英語を文献資料として子細に点検している。動名詞の確立に至る４段階のすべてがシェイクスピアの英語に見られ、動名詞発達の最も重要な位置にあること、進行形も発達の重要な段階にあり、ごく初期の進行形の特徴として、coming と going が最も頻繁に進行形に現れること、間投詞・感嘆詞が進行形と共起する場合が多いという指摘は従来明確ではなかった点であり新たな知見として評価できる。英語史研究全般に関する知識にやや欠ける点があるが最終試験では審査員の質問に対し明確な回答が得られた。

以上により、博士の学位を与えるのに十分な学力と見識を有するものと判定した。

授与する博士学位　　学術

最終試験結果　　合・否

試験委員

主査　（氏名）三輪伸春　　副査　（氏名）濱崎孔一郎

副査　（氏名）木部暢子　　副査　（氏名）橋本　功

副査　（氏名）角尾達成